

# 日本は

# ひとつ

## 兵庫からの恩返し

日本会議兵庫

### 「けつばれ」日本

十六年前の平成七年一月、私たちの住む町は、当時「未曾有の大災害」と言われる阪神・淡路大震災に見舞われました。悲しみと落胆の中、救援物資が届きました。箱を開けると、大きく「けつばれ！ 神戸!!」とのメッセージ。

「けつばれ...?」

正直、その言葉に初めて出会った私たちは、びんと来ず、とまどいました。しかしながら、あとで「けつばれ」とは東日本、特に東北地方で使われている言葉で「がんばれ」の意味だと知り、遠く離れていても同じ日本に住む人々の思い、ぬくもりが私たちの心にしんと伝わってきました。そして、よし、がんばろう！と未来へ向けて、次の一歩を踏み出す元気がわいてきたことが今でも忘れられません。

今年三月十一日、日本はまたもや「未曾有の大災害」に襲われました。あの時、私たちを励ましてくださった人々の住む町が壊され、流される映像が目に飛び込んできました。想像を絶する悪夢のような光景に言葉を失うと同時に被災地に住む人々の気持ちを思うと心が痛み、いてもたってもいられなくなりました。

私たちに今、できることはないか？  
けつばって欲しい、いや、一緒にけつぱりたい！  
今こそ恩返しの時だ。  
私たちは、そう考え、行動しています。

十六年前の阪神・淡路大震災の折、天皇皇后両陛下に行幸啓を賜り、頂戴したお言葉に私たち兵庫県民はどれほど勇気づけられたか計り知れません。今回の東日本大震災に際しても天皇陛下は被災地へ向けてビデオメッセージを流されました。しかしながら、被災地はまだライフラインが完全復旧しておらず、陛下のお言葉を拝聴できなかった方々が多いのが実状です。陛下のお言葉をできるだけ多くの人に届け、勇気づけたい。

だから、届けます。陛下のお言葉を。  
そして、感謝の気持ちと日本はひとつだという思いを。

## 天皇陛下 平成のご巡幸

### 被災地ご訪問

困難に見舞われた人々に御心を寄せ続けられて

天皇皇后両陛下は、大規模自然災害のたびに現地を訪れ、被災者を直接お励ましになることを強くご希望になり、その後も被災地の復興をずっと見守っておられます。両陛下の被災者への慈しみの御心は、「常に心を寄せつづける」という日常のご姿勢の表れです。



### 皇室の慈しみの伝統

「国民と苦楽を共にすることを常に願われて

天皇皇后両陛下は、とりわけ苦難を背負った人々、逆境にある人々に深い御心を寄せていらっしゃいます。皇室の歴史を振り返ると、その御心は百二十五代という伝統の中で受け継がれてきた皇室の精神であることがわかります。

### 両陛下にお励ましいたいて 避難所の重い空気が払いのけられた



天皇皇后両陛下は、阪神・淡路大震災直後の平成七年一月三十一日に、約千百名が避難する西宮市立中央体育館をお見舞いになりました。当時、避難所のお世話をしていた市職員の一ひとは、「覇気がなく、毛布にくるまっていたお年寄りが、両陛下が歩かれる時には起き上がり正座をしたのには驚きました。また、それまで本当に重かった空気がスーッと払いのけられたようでした」と語っています。

### 両陛下にお励ましいたいて 皇后陛下が手向けられた花が復興の象徴に

阪神・淡路大震災で最も被害の大きかった地域のひとつ、神戸市長田区の御菅地区も、平成七年一月三十一日に天皇皇后両陛下のお励ましをいただきました。焼け野原となった菅原市場の瓦礫の上に皇后陛下が手向けられた水仙の花に被災者は勇気づけられ、復興に向けての歩みを始めました。後にその時の水仙は、皇后陛下自らが皇居のお堀の側の花を摘んでこられたと知り、さらなる感動を。今、水仙の花は、その町にとつて復興のシンボルとなっています。



「日本会議」とは、日本の誇りを取り戻すべく、日本国民が集い、平成十年に結成された任意の民間団体です。  
現在、全国45都道府県本部、156支部にて日本の伝統文化を守るべく活動しています。

日本会議兵庫県本部事務局  
〒650-0015 兵庫県神戸市中央区多聞通3-1-1  
兵庫県神社庁内  
TEL 078-341-1145 FAX 078-371-6015  
ホームページ <http://nipponkaigi-hyogo.org>  
Eメール [info@nipponkaigi-hyogo.org](mailto:info@nipponkaigi-hyogo.org)

# 被災地への陛下からのメッセージ全文(平成二十三年三月十六日)

東日本大震災の被災者と国民にお言葉を述べられる天皇陛下  
このビデオメッセージは3月16日15時に御所で収録され同日16時30分に各局で放映された



この度の東北地方太平洋沖地震は、マグニチュード9.0という例を見ない規模の巨大地震であり、被災地の悲惨な状況に深く心を痛めています。地震や津波による死者の数は日を追って増加し、犠牲者が何人になるのかも分かりません。一人でも多くの人の無事が確認されることを願っています。また、現在、原子力発電所の状況が予断を許さぬものであることを深く案じ、関係者の尽力により事態の更なる悪化が回避されることを切に願っています。

現在、国を挙げての救援活動が進められていますが、厳しい寒さの中で、多くの人々が、食糧、飲料水、燃料などの不足により、極めて苦しい避難生活を余儀なくされています。その速やかな救済のために全力を挙げることにより、被災者の状況が少しでも好転し、人々

の復興への希望につながっていくことを心から願わずにはいられません。そして、何にも増して、この大災害を生き抜き、被災者としての自らを励ましつつ、これからの日々を生きようとしている人々の雄々しさに深く胸を打たれています。

自衛隊、警察、消防、海上保安庁を始めとする国や地方自治体の人々、諸外国から救援のために来日した人々、国内のさまざまな救援組織に属する人々が、余震の続く危険な状況の中で、日夜救援活動を進めている努力に感謝し、その労を深くねぎらいたく思います。

今回、世界各国の元首から相次いでお見舞いの電報が届き、その多くに各国国民の気持ちりが被災者とともにあると、言葉が添えられていました。これを被災地の人々にお伝え

します。海外においては、この深い悲しみの中で、日本人が、取り乱すことなく助け合い、秩序ある対応を示していることに触れた諷刺も多いと聞いています。これからも皆が相携え、いたわり合って、この不幸な時期を乗り越えることを衷心より願っています。

被災者のこれからの苦難の日々を、私たち皆が、さまざまな形で少しでも多く分かち合っていくことが大切であろうと思います。被災した人々が、決して希望を捨てることなく、身体(からだ)を大切に明日からの日々を生き抜いてくれるよう、また、国民一人ひとりが、被災した各地域の上にこれからも長く心を寄せ、被災者とともにそれぞれの地域の復興の道の手を見守り続けていくことを心より願っています。

## 東日本大震災後の皇室

静止を振り切り、崩れた宮中三殿に10人が参集されて…  
報じられない皇室ご一家の全身全霊17日間  
美智子さま「被災者の苦しみを分かち合いたい」  
灯火を止めて雅子さまと「救国の祈り」36時間！

- 「3月21日には、大震災が発生して以来、初めての宮中祭祀が行われました。「春季皇霊祭の儀」です。参集されたのは天皇皇后両陛下や皇太子さま、秋篠宮ご夫妻ら10人の方々でした(ある宮内庁関係者)
- 実は今回、両陛下の祭祀ご出席に反対の声もあがっていたという。「神楽舎の柱が地震で傾き、皇霊殿へ向かう廊下の天井板も崩れており、側近たちは「余震も続いておりまして、非常に危険です」とお止めし、掌典長による代拝をお勧めしたのです。しかし、天皇陛下と美智子さまは、「私たちに祭祀をさせて下さい」と、強くおっしゃったそうです(宮内庁関係者)(中略)
- 当日の午前10時ごろは、東京では冷たい雨。通常なら陛下は衣冠束帯、美智子さまは十二単風の古裝束をお召しになるが、庭上拝ということで、それぞれモーニングとローブモントの洋装でいらつしやった。
- 「春季皇霊祭は本来、両陛下が皇室

- の祖先に五穀豊穡や国民の幸せを祈る儀式です。今回は、「日本をお守りください、被災者をお救いください」と必死に祈られたことでしょうか。いくら建物の倒壊の危険があるといつても、代拝ですませるお気持ちではなかったのだと思います(皇室ジャーナリスト・松崎敏弥氏)
- 陛下と美智子さまは、特に9年から10年の間、頻繁に東北各県を視察されている。(中略)
- 「陛下と一緒に巡った地である東北へ、すぐにでも飛んでいきたい」と美智子さまは願っていたらつしやると思います。(中略)
- 3月16日には史上初めて天皇陛下のビデオメッセージが発表されましたが、ほかにも初めての試みが続いています。それらはすべて両陛下のご意向によるものだそうです(皇室ジャーナリスト・松崎敏弥氏)
- 天皇陛下は宮内庁の幹部たちにおつしやったという。
- 「ささやかでも宮内庁の施設を役立

- てもらえないだろうか」
- このご指示により、宮内庁は24日に次の3つの支援を発表した。
  - 1、那須御用邸の職員用の風呂を近隣地域にいる避難者に開放。
  - 2、御料牧場の食料を避難所に提供。
  - 3、東京都に避難している高齢の患者を宮内庁病院でも受け入れる。
- 実はこれらの施設のうち、栃木県にある御料牧場自体も甚大な被害を受けている。「乳製品や肉加工品などの製造の施設に被害があり、各製品を製造できない状態であるほか、貴賓館、集会所なども使用できない程度の被害を受けています。また職員の宿舎も居住できない程度の被害を受けています(宮内庁総務課報道室)
- まつたく報じられていないのですが、御料牧場からの、御所や東宮御所、各宮家への食材の提供は、震災後にストップしています。
- 震災は皇室の食卓も直撃していたのです。今回発表された御料牧場からの備蓄提供という支援は、両陛下の「私たちの食事より、被災者を優先させて欲しい」という深いお気持ちも込められていたのです(皇室ジャーナリスト・松崎敏弥氏)(中略)
- 日々の専門家からの事情説明に加え、両陛下が続けいらつしやるのが「自主停電」である。「執務が行われる宮殿は可能な限り使用されず、さ

- らに15日以降は毎日、お住まいである御所のブレーカーを一定時間落とす生活を続けていらつしやいます。1日に2回の停電をする場合は、合わせて4時間も電源を落とされています。(中略)
- 震災発生後の3月11日から27日までの17日間で、両陛下の「自主停電日」は13日間、のべ36時間にもなるという。
- 「皇太子ご一家から秋篠宮家の幼い悠仁さまにいたるまで、皇室が一丸となり決行されている「自主停電」は、天皇陛下と美智子さまが呼びかけられたものです。「国民と苦しみを分かち合いたい」という強いお気持ちのあらわれです。(中略)
- 灯火を消した闇の中で、両陛下がひたすら祈られているのは被災者の救済と、日本国民の幸せです。皇太子さま、雅子さま、愛子さまも、震災以来は東宮御所からお出掛けにならず、お慎みに日々を送っていたらつしやいます。
- 雅子さまも、美智子さまと同じように、祈りのときを過ごしていらつしやるのでしょう(皇室ジャーナリスト・松崎敏弥氏)
- 「天皇ご一家が心をつなげて捧げている「救国の祈り」は、きっと日本の未来を照らすはずだ」